太田市の東山道駅路

東山道駅路（とうさんどうえきろ）は、古代（奈良・平安時代）に都と東国を結んでいた道です。数年前までは、人が一人歩ける程度の細い道と考えられていましたが、発掘調査によって幅が12mもある広い道が全国各地で発見され、古代の律令国家が強い権力によって各地を支配していたことがわかってきました。

太田市では、発掘調査によって、北部には２本の道路が東西に走り、ここから南部に武蔵国へ向かう道があることがわかっています。

下原宿地区の東山道駅路（西から撮影）

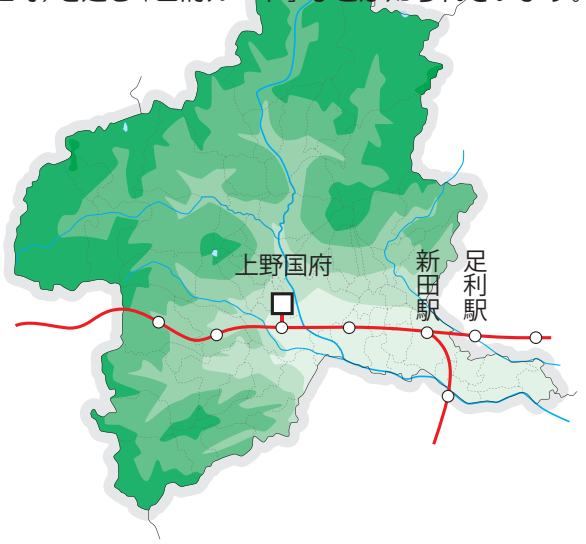
東山道駅路

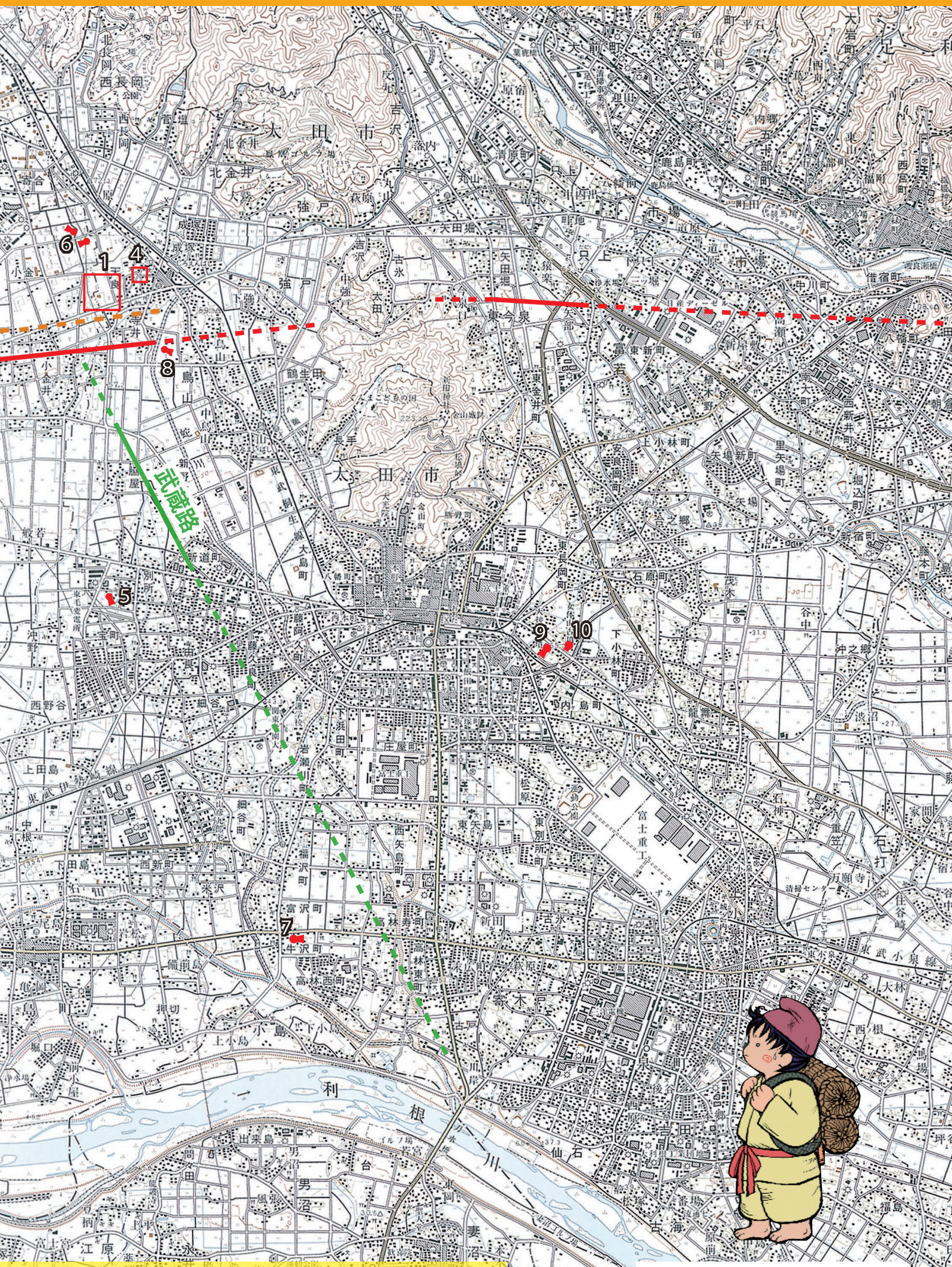
古代の日本は、都を中心とした畿内の５つの国（五畿）と山陽道、山陰道、南海道、西海道、東海道、北陸道そして東山道という七つの地域（七道）に分けられていました。東山道は、近江国、美濃国、飛騨国、信濃国、上野国、下野国、陸奥国、出羽国（771年までは武蔵国も含まれていた）の8つの国が所属していました。都とこれらの国を行き来するための道が東山道駅路です。駅路には16㎞ごとに宿泊や休憩の施設である駅家が置かれました。駅と駅を結んでいたことから「駅路」と呼ばれています。近年の発掘調査によって、全国各地で古代道路が発見され、幅10m前後もある大きな道が全国に巡らされていたことがわかってきました。

群馬県の東山道駅路

東山道駅路は、現在の中央自動車道に近いルートで長野県に入り、碓氷峠を越えて群馬県に入ったと考えられています。群馬県から栃木県足利市に入り、栃木市の東で北に向かい、東北地方へと向かっていました。古代の東北地方には、蝦夷と呼ばれる、律令国家に反抗する人々がいたため、東山道駅路は、蝦夷に対抗するための軍用道路としての性格を持っていました。

群馬県では、太田市から伊勢崎市にかけて９㎞直線に走り、利根川の西部で北向きに走行を替える「牛堀・矢ノ原ルート」と上野国府（前橋市元総社町）を通る「国府ルート」などが知られています。





遺跡　3　境ヶ谷戸遺跡　4　寺井廃寺　5　円福寺茶臼山古墳
塚古墳　8　鶴山古墳　9　天神山古墳　10　女体山古墳

（国土地理院発行５万分の１地形図を使用）

太田市の東山道駅路

太田市では、近年の発掘調査によって、東山道駅路がどこを通過していたがかわかってきました。これまでの調査で、３本の古代の大きな道路遺構が発見されています。これらはいずれも幅10m以上の大規模な道です。これらはそれぞれ「牛堀・矢ノ原ルート」「下新田ルート」「武蔵路」と呼ばれています。いずれの道もほとんど遺物が出ないため、年代はわかりませんが、他の地域の成果から、７世紀後半から８世紀（今から1300年～ 1200年前）に利用された道と考えられます。

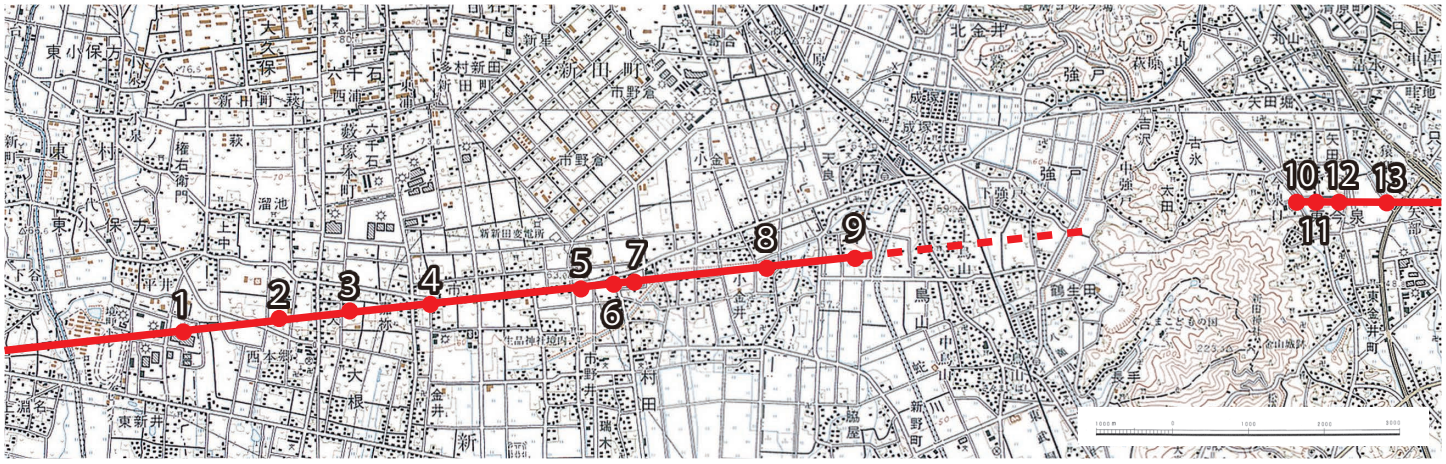
牛堀・矢ノ原ルート（東山道駅路）

昭和61年の矢ノ原遺跡（伊勢崎市境東新井町）の発掘調査によって、幅12mもある大規模な道路遺構があることがわかりました。この遺構は、確認された遺跡の名前から「牛堀・矢ノ原ルート」と呼ばれています。太田市では、これまで溜池・大東・市宿通・新田・原宿・境ヶ谷戸・下原宿・上根・久保畑地点など12地点で調査され、10㎞一直線に続くことがわかっています。大東地点では、側溝が地表に浮き出るソイルマークを観察することができます。いずれの地点でも、南北両側に幅1.5 ～ 2.5mの側溝を持ち、路面幅は12m前後あります。走行はほぼN － 83°-Eです。

新田地区の牛堀・矢ノ原ルート（西上空から撮影）
側溝間の距離は心々で約13m、路面幅は11 ～ 12mある大きな道です。

下原宿地区の牛堀・矢ノ原ルート（上空から撮影）
側溝間の距離は心々で約13m、路面幅は約12mある大きな道です。写真の右が東方向です。

大東地区の牛堀・矢ノ原ルートのソイルマーク（西上空から撮影）
畑の中に、東山道駅路の側溝の跡が黒く浮き出ています。作物を収穫し、畑を耕した後に見られる現象です。



1　矢ノ原遺跡　2　溜池地区　3　大東地区　4　市宿通地区　5　原宿地区　6　境ヶ谷戸地区
7　下原宿地区　8　上根地区　9　久保畑地区　10　八ヶ入遺跡　11　大道西遺跡　12　大道東遺跡
13　鹿島裏遺跡

久保畑地区の「牛堀・矢ノ原ルート」(北から撮影)

北側の側溝が幅３m以上に広げられ、この中が硬くなっていました。低地から台地へ上がる部分であったため、台地部分を切り通し状に削ったと考えられます。

溜池地区の公園として整備された牛堀・矢ノ原ルート

大道東遺跡の東山道駅路(西上空から撮影、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団提供)

金山東部の東山道駅路

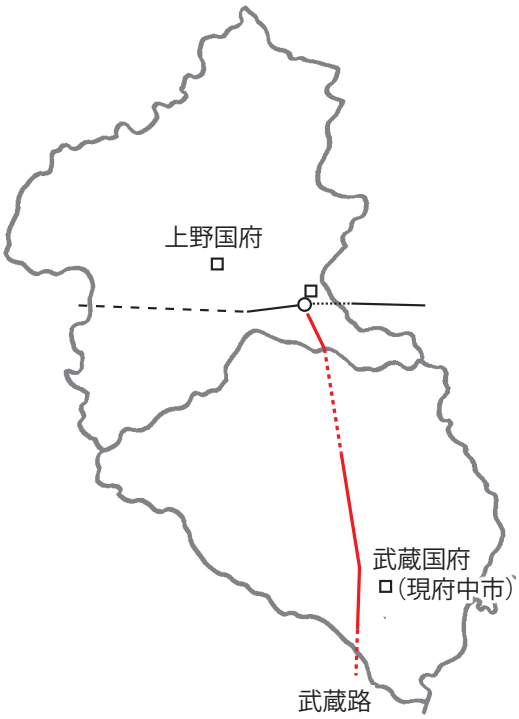
北関東自動車道の建設に伴う㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査により、金山東部の東山道駅路が明らかになりました。駅路は八ヶ入遺跡、大道西遺跡、大道東遺跡、鹿島浦遺跡で調査され、延長１㎞に渡って一直線に造られていることがわかりました。

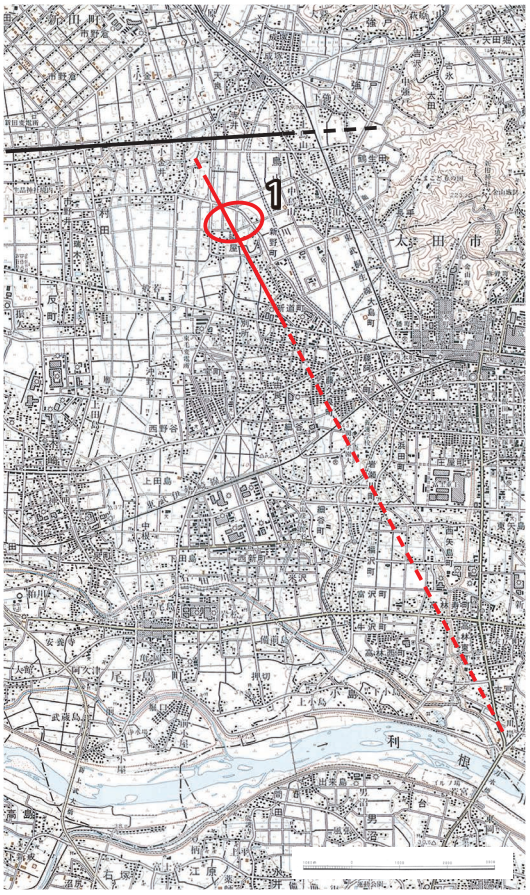
両溝間の心々距離は、12～13mで、金山西部の牛堀･矢ノ原ルートとほぼ同じ広さであることから、このルートの延長と考えられています。

東山道武蔵路

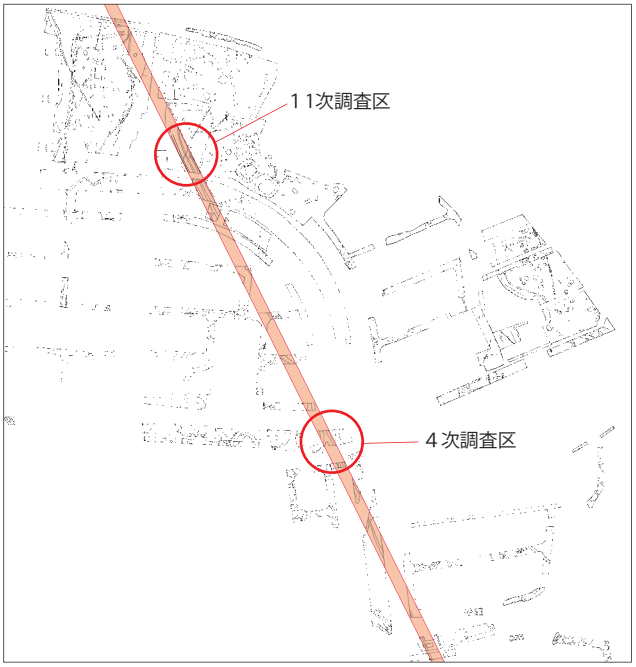
宝亀２年（771）の史料には、「東山道駅路は上野国新田駅から下野国足利駅へ向かい、武蔵国へは、新田駅から邑楽郡、五箇駅をへて向かっていた」ことが書かれています。この武蔵国へ向かう道を「東山道武蔵路」と呼んでします。史料では、「武蔵路」が宝亀２年（771）に廃止されたことがわかります。東京都や埼玉県では、武蔵路と推定される幅12mもある道路が発掘されています。

太田市では、城西町の新野脇屋遺跡群（１）の発掘調査で、武蔵路と考えられる道路遺構が見つかっています。この道路遺構は、８～13mの幅で、約640m直線に続くことがわかっています。





新野脇屋遺跡群11次調査区の推定東山道武蔵路
台地から低地へ向かう部分で、2本の溝が平行して見えます。溝間の距離は約９mです。



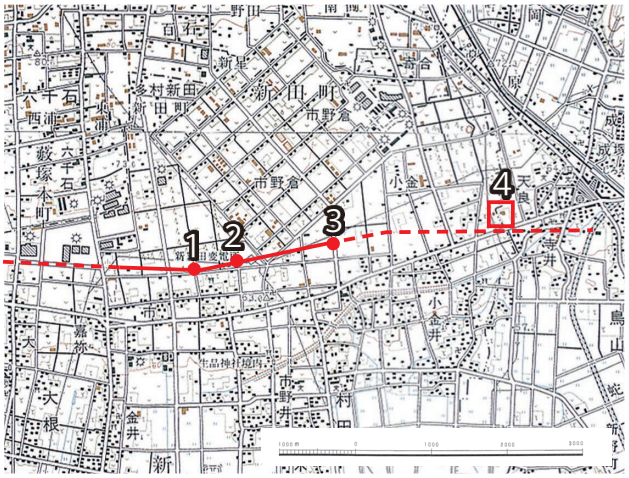
新野脇屋遺跡群全体図

新野脇屋遺跡群４次調査区の推定東山道武蔵路

下新田ルート

平成２年の下新田遺跡（太田市新田市町）の発掘調査で、両側溝を持つ幅約10～11mの道路遺構が200m以上調査されました。この遺構は、８世紀から９世紀を中心とした時期の道路と考えられます。「下新田ルート」と名付けられ、この後、原宿地区、宿裏地区でも調査が行われました。東へ延長すると新田郡衙の南部を通ることがわかっていましたが、平成15年の宿裏地区の調査では、大きく北方向に走行を変え、西に延長すると佐位郡衙（三軒屋遺跡）の南部を通過することがわかりました。両溝間の心々距離が12m前後と広く、各地で発掘調査された駅路と同規模であることから、牛堀・矢ノ原ルートが廃止された後の東山道駅路である可能性があります。

なお、下新田遺跡では、路面上に約1.8mの幅で２本のわだち状の硬化面が確認され、この上を車が通ったことが考えられます。



1　宿裏地区　2　下新田遺跡　3　原宿地区
4　天良七堂遺跡

宿裏地区の下新田ルート（西上空から撮影）

下新田遺跡　路面に残るわだちの跡

下新田遺跡の道路遺構（西から撮影）
道路は写真右手の金山と左手の八王子丘陵の間の低くなった部分に向かっています。

東山道駅路周辺の遺跡

東山道駅路の周辺には、古代の重要遺跡が密集しています。これらは、新田郡の役所である郡衙や新田駅家にかかわりの深い遺跡と考えられています。

天良七堂遺跡（新田郡衙）

太田市天良町の天良七堂遺跡は新田郡に置かれた役所の新田郡衙であることがわかっています。中心施設である郡庁は一辺90mという、全国でも最も大きい規模の郡庁です。下新田ルートはこのすぐ南を通過する可能性が高いことがわかっています。郡庁とこの周辺は、平成20年に上野国新田郡庁跡として史跡に指定されています。

新田郡庁跡（空撮）

境ヶ谷戸遺跡

入谷遺跡の南西600mにあり、これまで７回の調査で、唐三彩陶枕や円面硯などの特殊遺物が出土しています。現在のところ、東山道駅路か新田駅家と係わりの深い豪族のすまいと推定されています。２号住居跡から出土した唐三彩を含む２号住居跡から出土した遺物は、平成17年に群馬県指定重要文化財に指定されています。

唐三彩陶枕

入谷遺跡

牛堀・矢ノ原ルートのすぐ北側で、東西約180mの溝による方形区画の中に２棟の瓦葺礎石建物跡が造られていることがわかっています。東山道駅路に隣接した位置に当時最先端の瓦葺建物を建てたことから、新田駅家の候補地とも考えられていますが、古代の寺の可能性もあります。

礎石建物跡

寺井廃寺

天良七堂遺跡の東200mにあります。古代の瓦が多量に出土することから、群馬県内でも最も古く造られた寺で、新田郡衙に付属する寺院と考えられています。軒丸瓦は、昭和51年に太田市指定重要文化財に指定されています。

軒丸瓦

太田市教育委員会　文化財課
〒370-0495　群馬県太田市粕川町 520
TEL.0276-20-7090　FAX.0276-52-6080
印刷　平成 22 年３月